



CQM(超短期経済予測モデル)

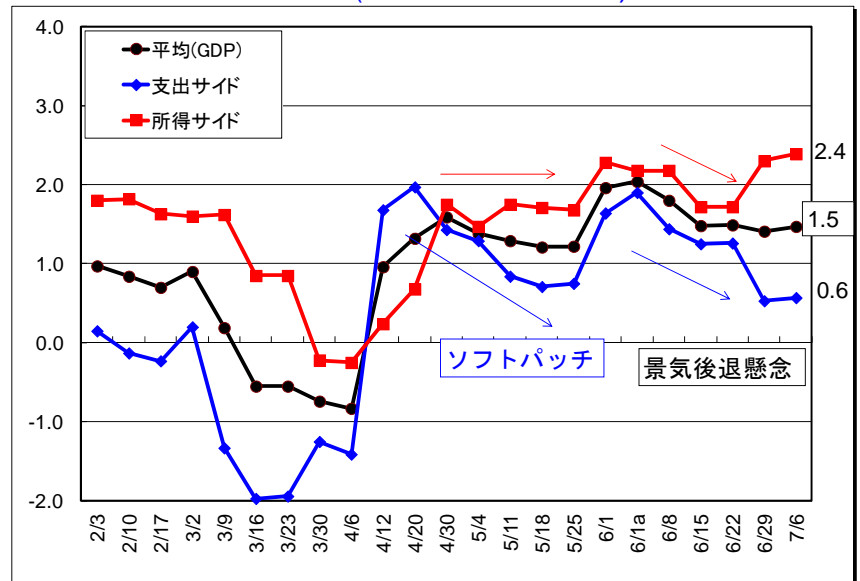
熊坂侑三 (APIR リサーチリーダー, ITエコノミーCEO)
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:kumasaka@iteconomy.com

米国経済(週次)予測(2012年7月6日)

ポイント

- ▶1-3 月期 GDP の確定値と 5 月の個人所得・消費支出を更新した 6 月 29 日の CQM 予測から、支出サイド、所得サイドからの実質 GDP 伸び率予測に乖離が生じ始めた。
- ▶4-6 月期の統計上の誤差の拡大が予想されるが、今後は月次統計の更新によりこの乖離はかなり小さくなるだろう。
- ▶5 月の貿易収支、企業在庫、6 月の消費者物価の更新により支出サイドから予測される実質 GDP が上方に修正されるだろう。
- ▶6 月の輸入価格、鉱工業生産指数、小売販売の更新により、所得サイドから予測される実質 GDP が下方に修正されるだろう。
- ▶4-6 月期の経済成長率(速報値)の今後を予想するならば、CQM 予測の平均値(1.5%程度)がよいだろう。

CQM 予測の動態：実質 GDP 成長率
2012Q2 (%、前期比年率換算)



<支出サイドと所得サイドから予測される実質 GDP 成長率の乖離は今後どのように収束するか？>

7月6日のCQM予測は5月の建設支出、工場受注(耐久財出荷)、自動車在庫、6月の農産物価格及び雇用統計を更新した。その結果、4-6月期の実質GDP伸び率は支出サイドでは0.53%から0.57%へ、所得サイドでは2.30%から2.39%へそれぞれ上方に修正された。両サイドからの平均実質GDP伸び率は1.41%から1.47%へと上方に修正された。ヘッドラインインフレ率は前週の0.94%から0.89%へと下方修正されている。

1-3月期GDPの確報値と5月の個人所得・消費支出を更新した6月29日のCQM予測から予測される、支出・所得サイドの実質GDP伸び率の乖離が大きくなった。今後のCQM予測でどのようにこの乖離が収束していくかを予想してみる。

- 6月の貿易収支により純輸出が大きく改善される。
- 7月の輸入価格が大きく低下しGDP価格デフレーターが上方に修正され、所得サイドから計算される実質GDPが下方に修正される。
- 6月の小売販売・鉱工業生産指数があまり伸びず、所得サイドの企業所得が下方に修正される。
- 7月の消費者物価指数の伸び率が小さく、実質個人消費支出が上方に修正される。
- 製造業以外の6月の企業在庫がかなり伸び、NIPAの在庫増を上方に修正する。

今週のCQM予測から4-6月期の経済成長率をGDP以外の国内需要、最終需要などのアグリゲート指標でみると1.8%~2.5%とそれほど低くない。通常、政府発表による経済成長率の速報値はCQMの支出サイドからの実質GDP予測値に近いが、現在の時点ではCQM予測の両サイドからの平均値である1.5%程度と考えるのがよいだろう。これは今の市場のコンセンサスより0.5%程度低い。今後のインフレ状況、实体经济を考えると、今後の金融政策がかなり金融緩和にバイアスをもつことが予想される。

・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
 ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
 ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6441-0550